

## 男子部中等科・高等科 「皆で創り上げた作品と展示会場」

中川 龍

自由学園では、『自然豊かなキャンパスを生かした美術教育は、「しっかりものを見る、描く、作る」という体験を通して、「感じる心、表現する力」を育てます』とある。現状をふまえ男子部でもこの目標に沿って取り組めるよう努力した。正面の芝生には屋外展示としてクラス皆で取り組んだ作品を男子部らしい迫力で展示することができた。体操館の中には室内展示も配置した。学校林（名栗植林地）から生徒が切り出した桧や杉の丸太を多く使うこともできた。さらに今回3つの試みをしている。木につながる学びのまとめ、他教科とのつながりの取り組み、男子部みなで創り出すアート体験、これらを通して今後の情操教育につながっていく学びとなるように工夫していきたい。

I. はじめに展示会場入口に掲示された男子部部長の言葉を紹介する。

今年は色づくのが遅いと感じていましたが、このところの寒さの中で、男子部入口のもみじの葉も美しく真っ赤になりました。春夏秋冬、自由学園の庭には四季それぞれの美しさがありますが、秋の紅葉の美しさは格別です。

「学園は緑が多くて気持ちがいい」、「自然がきれい」。入学したばかりの頃はこのように語る生徒たちですが、しばらくするとその恵まれた自然環境に慣れてしまい、上級生からそのような感激の言葉を聞くことは少なくなります。一見、時と共にこの自然の美しさは無感覚になってしまったようにも感じられますが、私はそうではなく、美しい自然を自然なこととして感じると感性が生徒たちの中に育っていると思っています。本物の芸術作品を見分ける力をつけるためには本物をたくさん見ること、と言われますが、それに似ているように思います。この感覚は決して一朝一夕で身につくものではありません。

紅葉の美しいこの季節は、同時に落ち葉の季節でもあります。

生徒たちの毎日の学校生活は校内の掃き掃除から始まります。毎朝7時過ぎに、その日の当番の生徒たちが集まり、手に手に竹ぼうきを持ってそれぞれ割り当てられた場所の掃除を始めます。

今朝は気温も下がり冷たい風が吹いていましたが、私が正門を通った時には道端にはすでに掃き集め

られた落ち葉の山がいくつもできていました。掃き終えたばかりの道に、風に吹かれた落ち葉が新たに舞い散る中、生徒たちはあちらこちらに散らばり黙々とほうきを動かしていました。・・・中にはほうきを振り回して遊んでいる生徒たちもいましたが・・・紅葉の美しいこの季節は、生徒たちにとっては落ち葉との格闘の季節でもあるのです。

美しいキャンパスをさらに美しく掃き清める毎朝の掃除の中で、生徒たちの美しさと清潔を愛する心が磨き上げられていくことを、そして今回生徒たちが取り組んだ数々の作品が、その心にしっかりと支えられたものであることを、心から願っています。

男子部部長高橋和也



男子部美術指導者

古川武彦 大谷俊一 望月勤 小貫善二  
井崎真奈 松本徹 村井泰子 中川龍

## II. 発表準備までの学習

男子部全員で取り組んだテーマ3つについて紹介する。

### ①藍染め（指導：村井泰子先生）

美術展も翌週に控えた11月6日（火）。男子部全学年が一斉に藍染に取り組む。一枚6mの布を中学一年生から高校3年生までの6人一組で染め上げる。染め上った布は全部で44枚にもなった。この藍染で染めた布は美術展で展示する。

皆で創り上げる「美術展」といっても、作品は個人や学年でばらばらに分かれて製作する結果になりがちだ。「全学年で作る唯一の作品である藍染を、普段やる機会のない人も含めて男子部全員でやることができたのはとてもよかった」そう語ってくれたのは美術展のリーダー学年である高等科三年生のM君である。

今回の藍染は高等科三年生が中心となって進められた。藍染作家で男子部にも講師として来てくださっている村井泰子先生に高等科三年生が指導してもらい、それを自分の組の下級生に教え一緒に作業をした。

藍染のやり方はいたってシンプルである。輪ゴムなどで布を縛って藍液に付け、少し待ってから取り出して輪ゴムを解いて、水で洗う。これで完成だ。どんな模様ができるのか、出してみるまで分からない。それが藍染の楽しさでもある。また、工夫をすれば規則性のあるきれいな模様も作り出すことができる。それもまた藍染の魅力の一つだ。今回の藍染は村井先生の指導により三種類の木の型を使い、布の織り方も山折り、谷折りと工夫して染めたことによって、きれいな模様染め上った。「藍染はすべての出来上がりが違うから、ほかのグループの藍染も気になるし、自分たちの布も気になったりした」と中等科三年のH君。

グループは縦割り、男子部の昼食のテーブルのメンバーで一枚を染めた。普段関わりのない学年の上下級生と話すよい機会になったのではないだろうか。

今年入学した高等科新入生のO君は「学校全体で一つのことをするのが初めてですごいなと思います」と学園独特の空気を肌で感じているようであった。最後に美術展に対しての意気込みを求めると「時間が全然足りないのもっと準備期間が

ほしいです」と一言。全員で一つを創り上げる今回の経験を通して、美術展に向けてよい準備の時を過ごしてもらいたい。彼らの作品が男子部芝生に勢ぞろいする。



### ②陶芸（指導：小貫善二先生） 全員の足跡を残そう。「現在の足形」を写し取り男子部皆の歩みを屋外作品にする。男子部全員で取り組んだこのテーマ、皆が夢中に制作。粘土に押し付けた自分の足形のラインでの平面構成。柔らかい粘土を彫りレリーフ作り。時間も忘れ夢中に取り組む。

その他、屋外展示の合作は望月勤先生指導の動物。立体構成として角材の集合体の4体。鍛金鍛造の基礎を学ぶジュエリー。先ず伝統工芸技術【鍛金（たんきん）】について学び、今回は原型製作のみを皆でする。シルバーアクセサリーのデザインを考え、手作りジュエリーに取り組んだ。指導者は男子部卒業生でジュエリー作家の松本徹氏。興味ある素材でした。

更に「恐竜」を合作。「クラス皆で取り組む合作がこのクラスはない。やらないか？」との問いかけに、Oがすぐに立候補しリーダーとなる。彼の明るい呼びかけに「Oがリーダーならついてくよ」との声も多かった。2チームにクラスを分け、UとKにチームリーダーに任命。これが適任だった。Oの提案で「恐竜」をテーマに。骨格の図をいかに拡大するか苦労したが、クラス全員が自分の担当の骨を決める。合板に骨格の拡大図を各自写し、電動のジグソーで切り抜く。解散後もほとんど全員が自主的に、夢中に制作し協力して教え合っ

いる姿、新入生もみな一つになっての制作。初めてこのクラスが見せた良い光景、一つの目標に向かってクラスが耕されている時を感じた。

### Ⅲ. 終わりに男子部の生活に即した美術、木工の カリキュラ

ムの検討が早急に必要であると感じた。今回のような美術教育発表会という視点では、なお更であった。高等科では時間割に入っていないために時間数の確保ができない。(張り出し授業として実施している。)高等科でも基礎美術として週1時間行いたいと思うが、男子部美術教育の方向性と合わせて検討し授業内容を決めていきたい。



